

# ダルマキールティの論理学書における pramāṇa と samyagjñāna について

木 村 誠 司

クラッサー氏 Krasser, H は、近著 Dharmattaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis Laghuprāmāṇyaparīkṣāにおいて、〈プラマーナ〉(pramāṇa, tshad ma, 旧来の漢訳では「量」現代では一般に「正しい認識手段」と訳す。訳語自体まだ確定されていない段階にあるので、本稿では、カタカナ表記とする)<sup>1)</sup>と〈正しい知〉(samyagjñāna, yang dag pa'i shes pa)を、ダルマキールティ Dharmakīrti (600-660) は同義語としている、と述べ、両術語が入れ代え可能であることを文献上示した<sup>2)</sup>。しかし、はたして、それは全面的に正しい説なのだろうか。

ダルマキールティにとって〈プラマーナ〉論の真の課題が如何なるものであったかを考える時、簡単に同意出来る説ではないように思われる。本稿では、まず、〈プラマーナ〉と〈正しい知〉をダルマキールティの全論理書学中に探し、その事実を踏まえた上で、クラッサー説を再検討したい。

以下の表は、〈プラマーナ〉と〈正しい知〉が現われる箇所を示したものである。ただし、〈プラマーナ〉には、その変化形(たとえば, pramāṇena)派生語(たとえば, prāmāṇyam), 複合語の一分支(たとえば, pramāṇa-antara)等様々なヴァリエーションがあり、一々を示すと煩雑に過ぎるため、〈プラマーナ〉として一括して示す。

## 〈プラマーナ〉

著作名 (章)	ページ数	行 数	偈の番号	著作名 (章)	ページ数	行 数	偈の番号
(I)	p. 2	l. 14		(I)	p. 5	l. 4	
	p. 3	l. 6			p. 5	l. 6	
	p. 3	l. 7			p. 12	l. 21	
	p. 4	l. 5	k. 3		p. 13	l. 6	

ダルマキールティの理論学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について (11)

PV (I)	p. 14	<i>l. 6</i>	k. 19	PV (I)	p. 108	<i>l. 3</i>	k. 219
	p. 14	<i>l. 7</i>			p. 108	<i>l. 6</i>	
	p. 14	<i>l. 11</i>	k. 20		p. 110	<i>l. 10</i>	k. 311
	p. 14	<i>l. 12</i>			p. 120	<i>l. 22</i>	
	p. 16	<i>l. 11</i>			p. 155	<i>l. 13</i>	k. 314
	p. 18	<i>l. 1</i>			p. 155	<i>l. 14</i>	
	p. 18	<i>l. 21</i>			p. 155	<i>l. 15</i>	k. 314
	p. 25	<i>l. 28</i>			p. 155	<i>l. 18</i>	
	p. 26	<i>l. 3</i>			p. 164	<i>l. 14</i>	k. 315
	p. 26	<i>l. 10</i>			p. 165	<i>l. 20</i>	
	p. 26	<i>l. 23</i>			p. 165	<i>l. 21</i>	
	p. 27	<i>l. 5</i>			p. 165	<i>l. 22</i>	
	p. 27	<i>l. 9</i>			p. 165	<i>l. 23</i>	
	p. 27	<i>l. 11</i>			p. 165	<i>l. 24</i>	
	p. 31	<i>l. 8</i>			p. 165	<i>l. 25</i>	
	p. 31	<i>l. 12</i>			p. 165	<i>l. 27</i>	
	p. 51	<i>l. 3</i>			p. 166	<i>l. 5</i>	
	p. 64	<i>l. 18</i>			p. 166	<i>l. 10</i>	
	p. 93	<i>l. 19</i>			p. 166	<i>l. 13</i>	
	p. 101	<i>l. 4</i>	k. 198		p. 166	<i>l. 14</i>	
	p. 101	<i>l. 13</i>			p. 166	<i>l. 15</i>	
	p. 101	<i>l. 17</i>			p. 166	<i>l. 16</i>	
	p. 101	<i>l. 18</i>			p. 166	<i>l. 22</i>	
	p. 102	<i>l. 1</i>			p. 166	<i>l. 23</i>	
	p. 102	<i>l. 10</i>			p. 166	<i>l. 24</i>	
	p. 102	<i>l. 14</i>			p. 166	<i>l. 24</i>	
	p. 102	<i>l. 15</i>			p. 166	<i>l. 25</i>	
	p. 102	<i>l. 19</i>			p. 168	<i>l. 2</i>	
	p. 102	<i>l. 20</i>			p. 169	<i>l. 2</i>	
	p. 102	<i>l. 20</i>			p. 169	<i>l. 29</i>	
	p. 102	<i>l. 21</i>			p. 170	<i>l. 4</i>	
	p. 103	<i>l. 9</i>			p. 170	<i>l. 15</i>	
	p. 103	<i>l. 10</i>			p. 170	<i>l. 19</i>	
	p. 103	<i>l. 11</i>			p. 171	<i>l. 3</i>	
	p. 103	<i>l. 16</i>			p. 171	<i>l. 6</i>	
	p. 105	<i>l. 3</i>			p. 171	<i>l. 7</i>	
	p. 107	<i>l. 14</i>			p. 173	<i>l. 16</i>	
	p. 107	<i>l. 15</i>			p. 173	<i>l. 27</i>	

(12) ダルマキールティの理論学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について

PV (I)	p. 174	<i>l.</i> 5	k. 333	PV (III)			k. 89
	p. 174	<i>l.</i> 9					k. 91
	p. 174	<i>l.</i> 24					k. 99
	p. 175	<i>l.</i> 3					k. 101
	p. 175	<i>l.</i> 5			k. 335		k. 119
	p. 175	<i>l.</i> 5			k. 335		k. 120
	p. 175	<i>l.</i> 27					k. 121
	p. 176	<i>l.</i> 11					k. 239
	p. 176	<i>l.</i> 11					k. 286
	p. 176	<i>l.</i> 13			k. 340		k. 300
PV (II)			k. 1 k. 2 k. 5 k. 7 k. 8 k. 8				k. 310
							k. 317
							k. 347
							k. 366
							k. 367
							k. 433
				PV (IV)			k. 2
							k. 3
							k. 4
							k. 16
							k. 73
							k. 73
PV (III)			k. 1 k. 14 k. 56 k. 58 k. 63 k. 65 k. 68 k. 69				k. 91
							k. 96
							k. 99
							k. 101
							k. 104
							k. 215
							k. 237
							k. 279
				PVin (I)	p. 30	<i>l.</i> 19	
					p. 30	<i>l.</i> 20	
						<i>l.</i> 22	k. 1
					p. 32	<i>l.</i> 12	
					p. 32	<i>l.</i> 16	
					p. 34	<i>l.</i> 17	
						<i>l.</i> 19	

ダルマキールティの理論学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について (13)

PVin (I)	<i>l.</i> 21	k. 2	PVin (II)	p. 70	<i>l.</i> 5	
	<i>l.</i> 24	k. 2		p. 80	<i>l.</i> 1	
	p. 36	<i>l.</i> 3		p. 104	<i>l.</i> 10	
	p. 36	<i>l.</i> 8		p. 104	<i>l.</i> 30	
	p. 36	<i>l.</i> 9		p. 106	<i>l.</i> 25	
	p. 38	<i>l.</i> 7		p. 106	<i>l.</i> 31	
	p. 38	<i>l.</i> 24		p. 112	<i>l.</i> 28	
	p. 60	<i>l.</i> 17		p. 112	<i>l.</i> 29	
	p. 60	<i>l.</i> 17	PVin (III)	187b/3		
	p. 62	<i>l.</i> 28		187b/3		
	p. 74	<i>l.</i> 3		187b/4		
	p. 78	<i>l.</i> 12		187b/6		
		<i>l.</i> 14		187b/6		
		<i>l.</i> 19		188b/7		
	p. 82	<i>l.</i> 28		194b/5		
	p. 84	<i>l.</i> 1		194b/5		
	p. 90	<i>l.</i> 3		196a/6		
	p. 90	<i>l.</i> 17		196a/7		
	p. 90	<i>l.</i> 22		196a/7		
	p. 94	<i>l.</i> 14		196b/5		
	p. 98	<i>l.</i> 27	k. 58	196b/6		
	p. 100	<i>l.</i> 16		196b/6		
	p. 100	<i>l.</i> 20		197a/1		
PVin (II)	p. 26	<i>l.</i> 8	k. 6	197b/2		
	p. 26	<i>l.</i> 11	k. 7	197b/4		
	p. 26	<i>l.</i> 22		197b/5		
	p. 28	<i>l.</i> 3		197b/6		
	p. 28	<i>l.</i> 3		197b/6		
	p. 28	<i>l.</i> 11		197b/6		
	p. 28	<i>l.</i> 29		197b/7		
	p. 42	<i>l.</i> 10		198a/2		
	p. 54	<i>l.</i> 6		198a/3		
	p. 54	<i>l.</i> 19		198a/3		
	p. 54	<i>l.</i> 22		198a/3		
	p. 62	<i>l.</i> 17	k. 37	198a/3		
	p. 62	<i>l.</i> 31	k. 41	198a/4		
	p. 64	<i>l.</i> 3	k. 42	198a/4		
	p. 68	<i>l.</i> 4		198a/5		

(14) ダルマキールティの理論学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について

PVin (III)	198a/5		HB	p. 34	<i>l.</i> 3
	198a/7			p. 34	<i>l.</i> 3
	199a/1			p. 34	<i>l.</i> 13
	199a/4			p. 34	<i>l.</i> 17
	199a/5			p. 34	<i>l.</i> 19
	199a/6			p. 34	<i>l.</i> 27
	199a/6			p. 36	<i>l.</i> 3
	199a/7			p. 36	<i>l.</i> 3
	199b/1			p. 40	<i>l.</i> 6
	207a/7			p. 72	<i>l.</i> 24
	207b/4			p. 74	<i>l.</i> 9
	207b/4			p. 78	<i>l.</i> 22
	207b/5			p. 80	<i>l.</i> 22
	208a/4			p. 82	<i>l.</i> 4
	208a/4			p. 82	1.30
	208a/5			p. 86	<i>l.</i> 19
	208b/2			p. 86	<i>l.</i> 23
	208b/2			p. 92	<i>l.</i> 16
	209b/6			p. 94	<i>l.</i> 26
	212a/3			p. 96	<i>l.</i> 14
	212a/3		VN	p. 5	<i>l.</i> 10
	217a/5			p. 5	<i>l.</i> 15
	217a/6			p. 6	<i>l.</i> 22
	217a/6			p. 6	<i>l.</i> 26
	225a/5			p. 7	<i>l.</i> 1
	225a/6			p. 8	<i>l.</i> 15
	226b/3			p. 9	<i>l.</i> 18
	226b/3			p. 14	<i>l.</i> 5
	226b/4			p. 21	<i>l.</i> 28
				p. 28	<i>l.</i> 1
NB (I)		k. 19		p. 28	<i>l.</i> 2
		k. 20		p. 28	<i>l.</i> 7
NB (II)		k. 4		p. 73	<i>l.</i> 19
		k. 49		p. 73	<i>l.</i> 20
NB (III)		k. 131		p. 73	<i>l.</i> 23
				p. 75	<i>l.</i> 19
HB	p. 32	<i>l.</i> 11		p. 84	<i>l.</i> 7
				p. 90	<i>l.</i> 1

ダルマキールティの理論学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について (15)

## 略号および使用テキスト

PV (I) Pramāṇavārttika ed. by R. Gnoli

PV (II)•(III)•(IV) ed. by Y. Miyasaka

PVin (I) Pramāṇaviniścaya ed. by T. Vetter

PVin (II) ed. by E. Steinkellner

PVin (III) sDe dge ed. No. 4211

NB Nyāvabindu Bibliotheca Buddhica V

HB Hetubindu ed. by E. Steinkellner

VN Vādānyāva ed. by P. P. Gokhale.

SS Santānantarasiddhi Bibliotheca Buddhica XIX

SP Sambandhaparikṣā ed. by E. Frauwallner.

(本文中使用のテキストも同じ)

上記の表において、確認できる事実は、〈正しい知〉の用例がたった四例しかないこと。その四例は、『正理一滴』 Nyāyabindu・『量決択』 Pramāṇaviniścaya という総論的論理学書の冒頭部分においてのみ見られ、もうひとつの総論的

(16) ダルマキールティの理論学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について

論理学書『量評釈』*Pramāṇavārttika* には全く見られないことである。この事実をどのように判断すればよいだろうか。〈プラマーナ〉と〈正しい知〉が同義語ならば、〈正しい知〉の用例がもっと数多くあってよいのではないだろうか。この極端な用例の少なさは、〈正しい知〉の使用に何らかの意図があることを示してはいないだろうか。ともあれ、クラッサー説を検討してみよう。クラッサー氏の示す証拠は、まず、「〈プラマーナ〉とは、欺くことのない知である」(*pramāṇam avisamvādi jñānam*)『量評釈』(II)「量成就」*pramāṇasiddhi* 章 k. 1 という一文である。確かに、ここでは、〈プラマーナ〉は「知」とされている。次に、同氏は、「〈正しい知〉は二種である」(*dvividham samyagjñānam*)『正理一滴』(I) k. 2=『量決択』(I) p. 30, l. 15 という文を示す。これを「〈プラマーナ〉は二種である」(*mānam dvividham*)『量評釈』(III)「現量」*pratyakṣa* 章 k. 1 という文と比較すれば、同氏の説は確かな根拠を得ているように見える。だが、クラッサー氏は、ダルマキールティの〈プラマーナ〉論における重要な視点を忘れている。それは、『量評釈』「量成就」章で展開される世尊=〈プラマーナ〉説という視点である。同章でダルマキールティは、〈プラマーナ〉を「欺くことないもの」・「未知の対象を明らかにするもの」(*ajñātārtha-prakāśa*)と定義し、悟りに関しては、世尊の言葉だけが二定義を満たしていることを論理的に表明した。このいわば、論理的仏教論こそが、ダルマキールティにとって最も重要な〈プラマーナ〉論に他ならない<sup>3)</sup>。さて、かくも重要な〈プラマーナ〉論が、実は、『量評釈』「量成就」章においてのみ扱われ、他の総論的論理学書である『量決択』・『正理一滴』には欠如している。とすれば、『量評釈』と『量決択』・『正理一滴』とには、〈プラマーナ〉論に関して本質的に相違があるとみなすことができる。ダルマキールティが、この点を意識していたとすれば、その相違を示す目印を置いたと考えても不思議はない。その目印こそが〈正しい知〉という言葉ではだろうか。〈正しい知〉がそのような意図を荷って使用されていたならば、先の表で見た事実は説明がつくのである。つまり、ダルマキールティの真意からすれば、『量決択』・『正理一滴』の冒頭で使用されるのは、あくまでも〈正しい知〉という言葉であり、〈プラマーナ〉であってはならないのである。したがって、場合によっては、クラッサー氏の〈プラマーナ〉〈正しい知〉同義語説は、ダルマキールティの真意を正しく反映しないことになろう<sup>4)</sup>。

注

- 1) cf. Hattari, M: Dignāga, On Perception p. 74, Tom Tillemans, J. F.: Persons of Authority, Franz Steiner 1993, pp. v-vi.
- 2) Krasser, H: Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis Laghuprāmāṇyaparīkṣā Wien 1991, Teil 2, p. 12, note 41.
- 3) Bijlert, V. A.: Epistemology and Spiritual Authority, Wien 1989, pp. 115-168. Franco, E: The Disjunction in Pramāṇavārttika, Pramāṇasiddhi Chapter 5c (Studies in the Buddhist Epistemological Tradition ed. by E. Steinkellner) Wien 1991, pp. 39-51,特に pp. 44-48.  
〈プラマーナ〉論の研究動向を俯瞰するには Steinkellner, E & H. Krasser: Dharmattaras Exkurs zur Difinition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniśaya Wien 1989, pp. 3-5 参照。
- 4) 〈正しい知〉〈プラマーナ〉同義語説を疑うきっかけを与えてくれたのは、以下の書物である。Mohanty, J: Gaṅgeśa's Theory of Truth, Motilal 1989 (rep.) モハンティー氏の報告は次のようなものである。「ラーマーナスジャ Rāmānuja は, yathārthyā, prāmāṇya, samyaktva を別なレベルの真実性を示すものとして使用した」pp. 6-7

(1993 11/29 脱稿)

\* 表の不備は、できるだけ早く補いたい。〈正しい知〉が四例だけであることは、再チェックの結果、確実である。

(1994 3/10)